

たびたび大相撲観戦雑記

(平成 24 年春場所を終わって ひとこと)

< 1 > はじめに

薄氷を踏むような場面を見せながらも、最後に勝負強さを見せた白鵬が 22 回目の優勝を達成した。この状況の中で大関が 5 人いても誰も優勝できなかった。おまけに勝ち越すのがやっとだった大関が何人もいた。これが大相撲が現在抱えている大きな問題点であることに協会は気が付いていないし、マスコミも分かっていない。それにも拘わらず「綱取りだ!」「大関取りだ!」と騒ぎ立てているのには呆れるほかない。

< 2 > 話題となった把瑠都の綱取り

初場所に優勝したことで、にわかに「把瑠都の綱取り」というニュースが走りまくった。しかしながら、私はこのテーマには否定的だったため、さして注目もしていなかった。

先場所の相撲は「体を利用しただけの相撲」であり、しかもその中身は「腰高で上半身の力だけで取る相撲」が多かった。腰の位置やまわしの取り方など相撲の基本的な技術の習得が不完全な状態で、体と力だけで相撲をとっているの、怪我にも繋がりやすい。

把瑠都の相撲はまだ「基本」も出来上がっていないし、「自分の型」ができておらず、「二場所連続して優勝する力はない」し、仮に周囲に助けられて二場所連続優勝したとしても内容は伴っていないだろうと私は読んでいた。春場所が終わって、かような結果となり内心ホッとしていると言うのが正直なところである。

< 3 > 鶴竜の相撲に強さと安定感

鶴竜はさして大きな体でもないが、稽古で磨き上げた艶と膨らみが美しい。

井筒部屋と聞けば往年の相撲ファンなら誰もが鶴ヶ嶺を思い出す。まさに鶴ヶ嶺を彷彿とさせる相撲っぷりには以前から注目していた。腰の位置と構え、まわしの取り方、まき替えの旨さ、回しの切り方、両差しからの寄り身の美しさ、どれをとっても鶴ヶ嶺を思い出さざるを得ない。そしてこれらの全ての要素が整うことで叶う「土俵に叩き込むような見事な切れ味の出し投げ」は逸品である。

ここまでの出来栄から見ると、大関昇進についてのさしたるコメントはない。それよりも、相撲協会が処すべき大きな課題が後に潜んでいるのではないかと思っている。

一横綱・六大関という体制が始まることになる。美しく言えば群雄割拠の時代ということになるのだろうが、現実にはそうはならない。6 人の大関が、「二場所連続負け越しをすると陥落」という規定を睨みながら日々を過ごす。過去にも例があったように、保身を前提とした色々な動きが目立つようになり「大関互助会」や「クシロク（ハチナナ）大関」などなど良からぬことが再び起きることが懸念される。

琴奨菊、稀勢の里に続いて鶴竜が・・・、ならば俺もと狙いを定める力士が何人かいる。一横綱・七大関にならぬうちに「大関昇進基準」と「大関降格基準」の見直しは必至だと思うが、相撲協会はまだ問題の大きさに気づいていないと思われる。スコミもまだ騒ぎ出してはいない。

< 4 > 今場所活躍した中堅どころ

豪栄道は前半で三敗を喫したため目立たない存在だったが後半を無敗で駆け抜けて、いつの間にか準優勝同点の成績をあげて敢闘賞を受けた。目立たない存在だった理由は 12 勝の内容に現れている。自らの攻めで勝ち取った相撲があまりなく、流れの中でいつの間にか勝っていた相撲が多かった。おまけに引き技での勝

ち星が四つ、負けた三番もすべて引き技だった。これで敢闘賞をあげてもいいのだろうかと思ってしまうような内容だった。来場所になると「次の大関候補」と言ってマスコミが騒ぎたてるのは目に見えている。素質は充分にあるので、鍛え直して来場所に臨んでほしいものである。

豊ノ島も同様にいつの間にか11勝4敗の好成績で技能賞となった。相変わらず胸を出した反り身の相撲で、土俵際の綱渡りのような勝利が目についた。豊ノ島本来の技能相撲はあまり見られなかったのに技能賞ということは、選考する人のレベルが低いということかもしれない。稀に見る短軀で重心が低く、広い肩幅と強い腕力(かいなちから)なので、鋭い立ち合いから前まわしを引いて突進する相撲を身に付ければ今後の発展は間違いないと思うが、どうもそういう流れにはなっていないようだ。

豊真将は彼本来の粘りが戻ってきた上に攻めの力が増してきた。11勝4敗、引いたり逃げたりしない真面目な相撲っぷりの上、土俵上での礼儀作法がきちんとしていることから好感を持つ力士の一人である。来場所に期待したいひとりである。

高安も前頭7枚目で10勝5敗の好成績をおさめた。攻めの相撲と、守りに回っても最後まで勝負をあきらめない執念が感じられる土俵は見ていても気持ちが良い。鳴門部屋の力士の特徴である「腰の高さ」が気になるが、腰の高さを自覚して改善しようとしているようなので、これからさらなる活躍が期待できそうである。私なら彼に敢闘賞をあげたかった。

< 5 > 壁にあたった若手力士達

東西の前頭筆頭に並んだ妙義龍・栃の若は、初の上位体験として注目された。

妙義龍は低い腰の構えと安定した脚の運び、前進を基調とした相撲は好感を与えるものである。初挑戦の今場所は惜しくも一点の負け越し、7勝8敗に終わった。しかし、負けた相撲にも努力の跡がうかがえるので間違いなく近いうちに壁を突破できるものと見ている。

栃の若は初日稀勢の里を押し出して、今場所はやりそうだなと思って見ていたら、あれよあれよと言う間に5勝10敗と陥没してしまった。ふわっとした立ち合いと腰高の攻めが目立ち、そこをつけこまれての敗戦が目立った。

松鳳山も突き、押し、寄りの前進相撲で奮闘したが惜しくも7勝8敗に終わった。小柄ながら正面から相手に向かい、鋭いのだ輪攻めで直進する相撲は見ていても気持ちが良い。しかし、身長差がある相手に対してはガラ空きの懐を見せるようなもので、まわしを取られる結果になりやすい。今後工夫の余地があると思う。多くの解説者は**隠岐の海**の将来性を高く評価している。先場所は初の前頭上位進出で敗退し、9枚目まで落ちてしまった。しかし、9枚目でも8勝7敗しか上げられなかったところを見るとまだまだなのだろう。鋭い寄り身があったかと思うと呆気なく土俵を飛び出す一番があったりで、安定していない。何日目だったか、相手を土俵際で渡し込み気味に寄り倒した時に、渡し込んだ腕が土俵に着いてしまって物言いがついた。勝負に出た時には顔から落ちろという人が多い。わが身をかばう為に手が先に落ちるようでは勝負に命をかけているとは言い難い。

壁にあたった若手力士達の中から誰が飛び出してくるのか、ここ数場所は目が離せない。

以上